

「橘さん、終電まであとどれくらいですか？」

「えーと……あと1時間は大丈夫そうです」

「時間かかりそうなあったら、こっち回してください」

カタカタ、カチ。キーボードとマウスの音がイヤに響くオフィス。最低限の照明に絞られた職場には、私と部下の橘さんしか残っていなかった。壁掛けの時計はもうすぐ23時を指す。今週はずっと残業だったな……。

橘さんはセットしていた茶髪をがしがしと崩しながら、遠い目をして笑った。

「いや、もう終わりそうなので任せてください」

「あんまり無理しないで」

去年から私の部下として異動してきた橘さんは、見た目はチャラいけど仕事が速い。今では頼りにしている若手エースとして、自分の知っていることを教えている最中だった。

「だーいじょうぶですって！急に客先から連絡でも来ない限り……」

ブルルルルル……。

示し合わせたかのように鳴り響く私のスマホ。表示された名前を見ると、そこには客先の代表者。別に橘さんのせいじゃないけど、思わずじっと見てしまった。

「……フラグ、立っちゃいましたかね」

「橘さん、先帰っていいですよ。あとは私がやっつくんで」

「とか言って、いつとも柳川さん最後まで残るでしょ。……そんなに僕、頼りないですか？」

「そうじゃないですが……はい、柳川です。……ああ、はい……承知しました」

応答しながら PC でメモアプリを起動する。打ち込んだメッセージを見て、橘さんは苦笑いをしてキーボードを叩きだした。

『もうひと仕事、お願いします』

「腹減った～～」

「お疲れ様です。まさか今日中に終わるなんて思ってませんでした」

「ほんとですよお！さすが柳川さんっすね」

「いえ、橘さんが頑張ってくれたからです。助かりました」

PC の電源を落とし荷物をまとめていく。橘さんの目を盗んで、PC もカバンに滑り込ませた。ああ言っただけど実はまだ自分の仕事が終わっていない。まあそんなに残ってないし、土曜日で終わらせられるでしょ。

電気を消して施錠をし、エレベーターホールで数字が上がってくるのをぼんやり見る。資料はドライブに上がってるから、もうちょっと分析を詰めて……。土曜日のやることを羅列していると……ふと手を握られた。

「わっ！？橘さん？」

「もう仕事終わったから」

ね？と顔を覗き込んでくる笑顔が優しくて、ぐっと言葉が詰まってしまう。エレベーターが到着した音で我に返った。

「ま、まだ会社内だからだめです！」

「えー、もう誰もいないのに」

私たちは3カ月前から付き合い始めている。告白されたとき、チャライ橘さんが私のことを揶揄っているのかと思っていたけど、押しに負けて付き合えばこの有様。甘い、甘すぎる。

今の子からしたら普通なのかもしれないけど、仕事に没頭しすぎて恋人ができるのが久しぶりで慣れない。正直、どうしていいかわからない！パタパタと熱い顔を仰ぎながらエレベーターに乗った。

外に出ると生温い風が頬を撫ぜる。ここからご飯食べてお風呂かぁ、めんどくさいなぁ。駅に向かって歩くと、橘さんが手を繋いできた。

「ちょっ！誰かいるかもしれないのに」

「こんな時間に誰もいないですよ。それより柳川さん？」

「はい？」

「PC、持ち帰ってますよね？土曜まで仕事する気ですか？」

「あ、あはは……そんなまさか……」

目を逸らせばこちらを向けとばかりに、ぎゅっと強く手を握られる。恥ずかしさに音を上げて小さく頷けば、橘さんはじっとこちらを見て笑った。

「今日、泊まりに行ってもいいですか？」

「えっ」

仕事に力を注いでいるがあまり、生活能力へ回す分が無かった私はそれはもう酷い部屋だった。

「と、とりあえず一旦全部クローゼットに……」

近所のコンビニに橘さんを置いて、早10分。全力でコロコロして、橘さんへ来てもいい旨を連絡する。やばい、食器洗わないと！水回りは……私が先にお風呂入ればいいか。その時に……。

ピンポン。

「やばっ」

急いで扉を開けると、ビニール袋を提げた橘さん。

「急にすみません。お邪魔しまーす」

「き、汚いですが、どうぞ」

なんか、自分の部屋に誰かが来るなんて久しぶりで新鮮。変な感じ、と思いつつ水を机に並べた。橘さんは軽くお礼を言ってビニール袋を置く。

「それって？」

「よければ軽く夜食でも作ろうかなって。簡単なものですけど」

「えっ！すごい」

「なので、ちょっとキッチンお借りしてもいいですか？柳川さんは先にお風呂入っちゃってください」

お風呂場を掃除したかったからちょうどいい。お言葉に甘えてシャワーを浴びる。温かいお湯が一日働いた身体を緩めてくれた。

付き合って3カ月。でも平日は仕事、休日は寝落ちか持ち帰り仕事ばかりで、まともなデートらしいデートは片手で数えるほどしかしていない。キス以上のことも、橘くんが私の様子を見ていつも途中で止めてくれていた。

ていうか、部屋の掃除で忘れてたけど、初めての泊り！？え、どうしよう、こういうときって何するんだっけ！？やばい、下着って……ていうか橘さんって私のことそういう目で見て……ないよね？

いらないうことを悶々としてしまい、普段よりもゆっくりシャワーを浴びてしまった。リビングに戻るとそこには美味しそうな夜食が並んでいる。

湯気が立つうどんには卵が落とされており、横には冷ややっこ。サラダにはオリジナルらしいドレッシングがかかっていて思わずお腹が鳴った。

「ちょっと付け加えたくらいですけど。嫌いなものないですか？」
「いや、全部食べれます……。コンビニでもこんなちゃんとした夜食になるんですね」

「冷めないうちに食べちゃいませう。あ、先に髪乾かしますか？」
「いえ、先にいただきます」

二人で椅子に座り手を合わせる。柔らかめのうどんが疲れた体に沁みて、頬が緩んだ。

「……おいし」

そのまますぐ二口目を啜る。出汁の味がどんどん食欲をそそってきた。なんだか視線を感じてちらりと横を見ると、頬杖をついて橘さんがこちらを見ていた。

「あんまり見ないでくださいよ」
「いやあ、美味しそうに食べてくれるなあって」
「美味しいですから……」
「よかった。……ねえ、まどかさん」

二人のときに呼ぶのを許した、下の名前。まだ慣れないその響きに返事をする、橘さんは頬杖をついて唇を尖らせた。

「いつ敬語外してくれるの？」

「うっ……まだ、ちょっと……」

「名前でも呼んで欲しいし、もっと気軽に話してほしいなあ」

と、言っても強要はしてこない橘さんに甘えている自覚はある。でも、プライベートで男性に会うなんて数年無かったんだ。男性には敬語が染みついてしまってなかなか難しい。だからまずは……。

「た、橘、くん」

「……」

「あれ、やっぱり……」

「いや、その、はい。ありがとうございます」

口数が減った橘……くんは、そのままうどんを食べ始めた。何か気に障ることしちゃったかな。とはいえ、原因が分からないから私も伸びる前にうどんをいただく。

後片付けを引き受けて橘くんをシャワーへ促した。適当に部屋着とタオルを押し付けて、キッチンに向かうと、そこには綺麗なシンク……。洗っていなかった食器が綺麗に並べられていて、私は天を仰いだ。気を取り直して、少し遠くから聞こえるシャワーの音をかき消すように食器を洗っていく。

仕事に没頭して、最低限人間としての生活をして。休日は寝て、溜まった家事を片づけるだけ。これといった趣味も無い、面白みのない生活を長く続けていたからか、こうして人とプライベート過ごすことに違和感。

少しだけ楽しいのと、気疲れを感じて少し息を吐く。シャワーの音が途切れたのに気づいて、私は布団の準備に向かった。

「部屋着まで借りちゃって、ありがとうございます」

「……いや」

ラフな格好の橘くんは見慣れなくて少し照れる。この前イベントで買った大きめのTシャツが役に立った。

「これ、ドライヤー使ってね」

「あー、そうですね」

橘くんは少し考えた素振りをして椅子に座った。ガシガシとタオルで髪を拭いたあと、私に向かって微笑みかける。

「まどかさん、髪乾かして？」

「え、私が？」

「うん。ダメ？」

「へ、下手かもしれないし……」

「まどかさんに乾かしてほしいの」

困り眉で顔色を伺われて言葉が詰まった。断りづらい……っ！まあ、とんでもないお願いじゃないし、乾かしてあげればいいか……。

ドライヤーを手にとって、私より少し硬くて短い髪の毛に風を当てていく。やっぱり髪の毛短いと乾くの早いなあ。乾くの早くなったら、仕事に割ける時間も増えるかも。

「まどかさん、今何考えてる？」

「えっ、あー、髪短いと乾くの早くていいなあって」

「あはは、その時間で仕事しないでね？」

バレてるや。そんなまさか、と流して髪を手で梳くように乾かす。意外と難しいなあ、と手を動かして、ドライヤーを終えた。

「ちゃんと乾いてる？」

「うん、ありがとう」

髪をセットしてない橘くんはいつもよりちょっと幼くてかわいい。そして、若いなあ……としみじみ思う。5歳以上年齢が離れちゃうと、弟みたいな感情が芽生えちゃうな。ドライヤーを片づけていると、橘くんの少し不満げな声が聞こえる。

「僕、床の布団で寝ればいい？」

「あ、ベッドが良ければそっちでも」

「そうじゃなくて」

ふわ、と香るのはうちのボディークリーム。その奥に感じる、自分とは違う匂いに身体に緊張が走った。後ろからお腹に腕をまわした橘くんが、耳元で囁いてくる。

「僕は、一緒に寝られるのかと思ってたんで」

「やっ、急に、それは……」

「んー、じゃあ心の準備ができれば教えてね」

そう言って離れた彼は、敷いた布団に向かっていく。と、とりあえず今日は色々免れたか……？びっくりした……。こんなにドキドキして恥ずかしい、寝られるかな私。

私もベッドに入ると、床から橘くんが楽し気に宣言してきた。

「あ、これから毎週、お泊りにきますね」

「えっ、毎週!？」

「ダメな日は断ってくれていいので。僕結構家事好きなんで、色々お手伝いさせていただきますよ」

「で、でもそんな……」

「もっと彼氏に甘えてほしいんです。ダメですか、ね」

そんな寂しようにしないで欲しい!! 恋人っぽいことをしてあげてないのも気になってたし、家事を手伝ってくれるのは正直すっごくありがたい。でも、橘くんにお世話になりすぎるんじゃないか……。

「わ、分かりました」

「やったー、ありがとう」

嬉しそうに布団にもぐる橘くんを見て、私も電気を消して寝る体勢に入る。

自分の物じゃない衣擦れ、寝息、気配……。寝れる気がしない! こんなに身体は疲れてるのに! ぐるぐる答えの無いことを考えては消し、考えては消し。なんとか眠りについた。

コトコト、トントン……。聞き慣れない音で目が覚めた。寝返りをうつと綺麗に畳まれた布団。……あれ、昨日って?

「あ、おはようございます」

「……おはよう、ございます」

ペタペタと足音が聞こえて寝返りをうつと、橘くんがキッチンから笑いかけている。小さく返事をすれば、軽く笑って何か手を動かしていた。

そうだ、昨日お泊りしたんだった。スマホを見ると朝9時。普段より遅めの起床にまだ頭が回らない。今日は残りの仕事終わらせて……うーん。

少しするとふわ、とコーヒーの香り。更には何か焼く音が聞こえてくる。……もしかして。寝起き特有の重たい身体を起こしてキッチンへ向かった。まだ橘くんはこちらに気づいていない。後ろからのぞき込むと、フライパンにはフレンチトーストが並んでいた。

「おいしそう……」

「わあ！？びっくりした！」

「あっ、ごめんね？」

謝ると、つんつんと頬を突かれる。呆気に取られていれば、形のいい唇が三日月に笑った。

「昨日、ついでにフレンチトーストを仕込んでたんだ。苦手じゃなければ」

「え、そんな気遣わせてごめんね」

「ちょっとまどかさん？」

橘くんは、不満そうにまた唇を尖らせている。またなにか間違えちゃったかな。

「ごめんじゃないでしょ」

「……ありがとう、ございます」

「はい、どういたしまして」

恥ずかしくなって洗面所に向かうと、ぼさぼさの髪と締まりのない顔が映っていた。思わず顔が引き攣り、そのまま洗顔をして髪を整える。いつ

もの休日では気にしないけど、今日は事情が違う。こんな姿見られたのか、とショックを受けながら戻ると、机には完璧な朝食が並んでいた。

二人でいただきます、と手を合わせてフレンチトーストを口に運ぶ。甘くてどこか優しい味に頬が緩んですぐ次を口に入れた。ちら、と向かいを見ると嬉しそうな、愛しそうな瞳がこちらを見つめている。

「……あんまり見ないでください」

「美味しい？」

「……うん、美味しい」

平日とは違う、ゆったりした朝は気持ちよくて、心が温かくなった気がした。

とはいえ、仕事は終わらせないといけない。PCを開いて画面に向かうと、橘くんは着替えていた。

「まだ一緒にいてもいいですか？」

「えっと、仕事しなきゃいけないから……」

「もちろんそっち優先で」

「私は大丈夫だけど……」

「じゃあ僕は近くを散歩でもしてきます！お腹空いたら帰ってきますね」

「あ、じゃあ……」

玄関で合鍵を渡す。少し目を見開いた橘くんは、嬉しそうにそれを受け取った。

「ありがとうございます。これ、いつでも来ていいよってこと？」

「え……、事前に連絡はほしい、かも」

「あはは、冗談ですよ」

なにかあったら連絡してください、と言を残して橘くんは出ていく。自分が家に居るのに、鍵を閉める音が何だかむず痒い。

すごく、恋人っぽい……かも。恥ずかしい、そんな大学生みたいなことを考えてるのがすごく恥ずかしい！！気を紛らわせるように仕事に集中するのだった。

ガチャ、と玄関から扉が開く音。はっとして時計を見ると12時半を示していた。気付けば結構な時間が経っていたらしい。玄関へ行くと、ビニール袋を提げた橘くんがスニーカーを脱いでいるところだった。

「おかえりなさい。特に面白いものなかったでしょ」

「静かでいいところですね、この辺。これ、お昼ご飯にどうですか？」

軽くビニール袋を上げてみせる橘くん。その中には、少し行ったところにあるお寿司屋さんのテイクアウトらしい。結構うちから距離あるところだ。

「橘くんって呼んでくれるようになった祝いで」

「ふふ、なにそれ」

「次は敬語卒業祝いですね」

上機嫌で手を洗いに行く橘くんを横目に、リビングでお寿司を出して食べる準備を進める。一人の食事なんてお腹が満たせれば何でもよく、お寿司を家で食べるなんて選択肢はなかった。珍しい食卓に少しだけ、テンションが上がっている自分がいる。何となくそれを見ないようにして、お箸を並べた。

まだ残っていた仕事を片付けて片づけて……気づけば夕方になっていた。

「まどかさん、僕そろそろ帰りますね」

「あ、うん」

「よかったら作り置き、食べてください」

「うん……え！？作り置き！？」

急いで冷蔵庫を見るとタッパーに綺麗に詰められたお惣菜たち。うそでしょ、キッチン借りていいですか？とは聞かれたけどまさかそんな……。

「こんなことまで、ほんとごめ……」

「まどかさん？」

「……ありがとう。助かる」

「ふふ、感想待ってますね」

じゃあ、と部屋を出ていき、閉まった扉をぼんやりと見つめた。なんか私、とんでもなく世話やかれてない？

どことなくオフィス全体が憂鬱そうな月曜日の朝、眠そうな顔で出勤した橘くんに声を掛けた。

「おはよう。作り置き、美味しかったです」

「おはようございます。え、食べてくれたんですか？」

「はい。マリネみたいなやつが好きでした」

「えー嬉しいな。また今週も作りに行きますね」

嬉しそうに目を細める橘くんの目に、とろりと甘さが滲む。ダメだ、ここは職場！公私混同よくない！私はひとつ咳払いをして切り替えた。

「それもいいけど、金曜に作ってた資料で計算合わないところがあったから直しました」

「えっ」

「あと、この前客先にもっと体裁こうしてほしいって連絡来てましたよね。そこも対応してます」

「す、すみません……ありがとうございます」

「いや、それを確認するのが私の仕事なので」

「って、もしかして日曜日も仕事したんですか！働きすぎですって！」

やば、バレた。

橘くんの言葉を適当に流して、デスクへ戻った。ミスを直すだけなら誰でもできる。こうやって指摘して成長させるのが私の役割。うんうん、と一人心の中で頷いて業務に戻った。

お昼休憩から三十分ほど経った頃、スマホへひとつの通知が届いた。

『今日のランチです』

送られてきたのはオムライスの写真。最近こうして、何気ない写真が送られてくるようになった。別に私は何も送らないけど、橘くんが言うには「最近のコミュニケーションですよ」らしい。

『いいですね』

返信して私も遅れて昼休憩に入った。今日は近くのパン屋さんに行こうかな、とオフィスビルの外に出ると、植え込みに動く影が見える。近くに寄れば、茶トラの野良猫がこちらを見上げていた。警戒心が無いのか、にゃあと鳴いて座っている。

スマホのカメラを向けてシャッターを切った。

『近くにいました』

橘くんに送れば速攻で既読がつく。

『かわいいですね』

『ちょっと橘くんに似てる』

『僕がかわいいってこと？』

思わず緩みそうになる頬をぐっと引き締める。スマホを見てニヤニヤしているアラサー女性はだいぶ怪しい。

こんな、何気ないやり取りなんて面倒くさいと思っていたのに。気軽に、気を遣わずにできる日常に胸の辺りがじんわりと温くなる。買ったパンも何となく、写真を撮って橘くんに送った。

「ここはもう少し体裁を整えてください。数字もこれだけだと弱いのもう少し分析進めて」

「はい……すみません」

「お願いします」

今にも舌打ちをしそうな顔で、男性社員がデスクへ戻っていく。思わずため息が出そうなところをグッと押さえて、視線を PC へ戻した。

自分でも分かってる。頭が固くて細かいし、愛想も無い。気を付けてはいてもこうやって相手を不快にすることが多かった。特に男性には距離をとられやすい。申しわけないけど最近はそのままだにしている。誤解されても、仕事が回ればそれでいいと割り切っていた。

昼前、コピー機の前で資料をまとめていると、聞き覚えのある声が耳に入った。

「柳川さん、怖そうに見えるだけだよ」

思わず視線を向ければ、さっき指摘した男性社員と橘くんが立ち話をしている。物陰に隠れて見つからないよう身を隠した。いや、聞かない方がいいのは分かってるけど、あまりにリアルタイムな話題に聞き耳を立てる。

「でも、細かすぎるんだよあの人」

「それはお前も直さないからだろう。それにこの前、資料作りが丁寧で助かってるって言ってたし」

「え？」

「数字の裏付けが弱いと先方に突っ込まれて、困ってほしくなかったんだろ。ちゃんと考えてくれてるから、指摘貰えるんだろ」

男性社員は驚いたように目を瞬かせ、眉根を寄せた。

「わかりづら……」

「柳川さん、不器用なんだよ。お堅く見えるけど、部下思いだけだなー」

こんなところでも、橘くんに助けってもらってるんだ……。誰にも分かれなくていい、そう思ってたのに。

なんとなく居心地が悪くなって、その場を離れた。

定時を告げる音楽が流れ、軽く伸びをする。ふとスマホを見ると、橘くんから『今日の夕飯なにかリクエストありますか?』と連絡が来ていた。そうだ、今日金曜日だ。

うーん、……和食?作るのめんどうじゃなかったら、焼き鮭とか食べたいかも。

色々考えていれば、ふと近くを橘くんが通った。

「あ、橘くん。今日焼き鮭が食べたい気分かも。めんどうじゃなかったら」

「分かりました。準備しときますね」

「今日はこの後会議があるので、先帰ってもらって……」

ざわ……ひそひそ……。周りがざわついてふと我に返った。あれ、この会話って。

「橘くんと柳川さんってあんなに仲良かったっけ?」

「先に帰るって……もしかして付き合ってるとか?」

職場恋愛はいい顔をしない人もいるし、公私混同しないよう周りには言っていなかった。けど、秘密がバレたみたいで顔に熱がじわじわ集まってくる。何か否定しないと、と焦るほど言葉が出てこない。

すっと肩を抱かれる。驚いて見上げれば、橘くんがいたずらっ子のように笑っていた。

「僕ら最近、仲良しなんですよね〜?」

「え、ちょ」

「もー、柳川さんやーっにご飯行ってくれるって言ったのに！忙しすぎ！」

「なんだ、橘が懐いてるだけか」

橘くんが野次を飛ばされてる間に、耳打ちをされる。

「ほら、会議行っちゃってください」

「は、はい」

必要なものをまとめて会議室へと向かう。その間も橘くんは上手く立ち回ってくれたようで、大事にもならずその場はおさまったらしい。

別に言ってしまうても良かったのに、なんて今まで湧かなかった気持ちが胸を渦巻く。橘くんが変な噂をたてられるのは悪いし、それに。

「秘密にしたかった、とか？」

廊下で呟いた言葉は胸のどこかにすんと落ちて、空気に溶けた。

家へ帰ると、扉を開けた瞬間に焼き魚のいい香りが廊下まで漂っていた。お腹の音が鳴ったあと、リビングの扉が開いて橘くんが顔を出す。

「おかえりなさい！今日は早めのお帰りでしたね」

「まあ、そこまで急ぎじゃなかったから」

「じゃあ先にお風呂入っちゃってください」

洗面所に向かうと、もう完璧にセットされたタオル。お湯が張られた浴槽。この手際の良さはなんなんだ。

それからお風呂から出て、美味しいご飯を食べて少し眠くなったら、橘くんはドライヤーを持ってリビングへとやってくる。

「え、なにになに」

「今日は僕が髪の毛乾かしていい？」

「いやそれは悪いよ……！乾くの時間かかるし！」

「僕がやりたいの、だめ？」

そう言われたら私の負けだ。頷けば橘くんは嬉しそうにドライヤーを始める。優しい指先が髪を梳いたり、地肌を掠めたりして気持ちいい。バレないようにそっと目を閉じる。されるがままになっていると、指先が耳を掠めた。

「ん……」

「気持ちいいですか？」

「上手だね、橘くん」

根元が乾いてきて、ブラシを通して乾かしてくれる。そのときにも指が何度か耳や首に触れて、その度過剰に反応してしまった。こんなの気にしなければいいのに、不意打ちの刺激が身体を渦巻いて悪循環を生み出している。

「……っあ」

「はい、おしまいです」

「……ありがとう」

お風呂上りより逆上せた顔を見られないよう話題を変えた。

「……なんで言わなかったの」

「え？ああ、今日の……。今言っても変な感じに広まりそうですし……」

橘くんの手が肩に触れる。大げさに反応した私は、意味もなく机を見つめた。

「なんか柳川さんは言ってほしくないのかなあって」

「いや、別に……わざわざ言うことじゃないかと思って」

「じゃあ今度はいつでもいいの？」

「そ、それはまあ」

手はするりと前に回って、橘くんの唇が耳に触れた。身を振れば抱き込まれ、言葉は流し込まれていく。

「無理しないで？僕は秘密の関係みたいで嬉しいし」

「や、ちょ橘くん……っ！」

「知られちゃダメな関係って、なんかいい響きじゃない？」

唇が耳の形をゆったりなぞり、わざとらしく息をふうっと吹き込まれた。聴覚が過敏になったような錯覚に陥り、甘く食む音すら頭に響く。ぞわぞわ背中が粟立ってびくりと身体を振るわせると。

ガタン！

ブラシが机から落ちて、やっと我に返る。橘くんの腕から逃がれて立ち上がった。橘くんは、どこか余裕げで楽しそうな顔をしていた。

「……もう寝ましょっか」

「うん……」

その日も私たちは、別々の布団で眠りについた。

「柳川さん、ちょっといいかな」

「はい」

チームリーダーに呼び出され、会議室に入る。何の話だ、と PC を開くと手で制された。

「メモはいらない。柳川さんのポジションの話なんだけど」

「……はい」

「昇進の話なんだけど……やっぱり難しそうで」

「そうですか」

以前、少し聞かされていた昇進の話。新しく始まる案件のリーダーに、と言われ意欲は示していたけど、いい返事はもらえなかったらしい。

「客先が昔気質というか、ご時世から遅れてるというか……やっぱり男性がいいってことで、今回は若手をアサインすることになった。すまない」

「いえ、先方の希望ならそれに応えるべきかと」

「柳川さんにはサポートに回ってもらえると助かる。来週に顔合わせがあるからさ、場を和らげたり、笑ってメモ取ってもらえれば大丈夫だから」

「……はい」

それって、私じゃなくてもいいんじゃない？女性が笑ってその場にいればいい、なんて今の時代通用しないでしょ。今まで生活投げ打ってでも数字だして、成績を残しても、ずっと男性社員に抜かされていく。

仕方ない、分かってる。評価されていないわけじゃない。そう言い聞かせて、私は会議室を出た。

休憩室で自動販売機の前に立つ。どれを飲もうか、と視線を泳がせると目の前がぐにゃりと歪んだ。唇を噛みしめても止まらない雫を、俯いて床に落とす。

悔しい。悔しいに決まってる！誰よりも頑張ってるのに！なんでなんでなんで！こうやって泣いたら、女は泣けばどうにかなると思ってる、なんて言われる。だから、強くなるしかなかったのに。

冷たい缶ジュースを買って目を冷やす。いつもの、仕事人間の柳川まどかに戻るために。

終わらない……いくら手を動かしても仕事が終わらない！！

会議、会議準備、また会議、急な依頼にトラブル対応。色んなものが降りかかった今週のしわ寄せが、金曜日の今でも解消されていなかった。残っているのは私しかできない業務ばかりで、橘くんを含む全員は既に退勤している。

オフィスに一人、最後まで残るなんて久しぶりだった。最近はいつも橘くんが付き合ってくれて、本当に助かっていたことが今になって身に染みる。

ふと画面の時計を見ればもうすぐ終電。もう持ち帰って片づけるしかないか……。PCを一旦シャットダウンして、カバンに荷物を詰め込んでいく。連日の残業で重い身体を引き摺って、オフィスを後にした。

やっと着いた玄関の扉を開ければ、リビングから橘くんが出迎えてくれる。あー、人がいる部屋に帰ってくるって、なんでこんなに安心するんだろう。

「おかえりなさい、遅かったですね。ひと段落つきました？」

優しい声に、少しだけ肩の力が抜けた。けどだめだ、私にはまだ仕事が残っている。

「いや、まだ残ってるの。キリのいいところまで終わらせるつもり」「とりあえず、お風呂にします？」

今お風呂に入ったら絶対に寝る。とりあえずあれは終わらせて……いや、でもあれも早い方が……。仕事の段取りを考えながら適当に首を横に振った。

「じゃあ、僕に手伝えることありますか？ほら、データ集めるとか、分析とか」

「いや、大丈夫」

「ご飯食べました？軽く準備はしてるんですけど……」

「だからいいってば！私でなんとかできるから！」

そこまで言って我に返る。橘くんは静かに微笑んでこちらを見ていて。明るい暖色の廊下の明かりが目に染みる。「いいから」とぶっきらぼうに言って、リビングに入った。

橘くんは気を使ってくれたのか、散歩してきます、と部屋を出ていった。カタカタと自分がキーボードを叩く音だけが部屋に響く。オフィスと一緒に、なのに孤独感が強くてイライラが募っていった。タイピングミスが

目立ってきた中、やっと一区切りがつく。疲れた、とんでもなく疲れた。これでまだ折り返しなのがゾッとする。

何か飲みたい、と一人用の冷蔵庫を開ければ、所狭しと食材が詰まっていた。少し前まで、ペットボトルと卵しかなかったのに。がらっと変わったのは、間違いなく橘くんのおかげ。

「これ、今日の晩御飯？」

ラップに包まれたお皿が目に入る。取り出せば、そこには私が好きなぶりの照り焼きが出てきた。残業している私に好物を準備してくれたの？なのに、私はさっき……。

罪悪感で潰されそうになりながら冷蔵庫を閉めると、橘くんがリビングに入ってきた。

「ひと段落しました？」

「うん……さっきはその、ごめんね」

「悪気ないのは分かってますよ。僕、柳川さんのこと見てきたつもりなんです」

「え？」

「夕飯準備するんで、先にお風呂入っちゃってください」

半ば無理やり脱衣所へ押し込められる。服を脱いで入れば、湯けむりが立ち込めていてお湯が浴槽に張られていた。身体を洗って浸かれば、全身からじんわりと力が抜けていく。

気持ちいい、このまま眠ってしまいたい。烏の行水が基本だった生活も、橘くんが泊まりにくるようになってから湯に浸かることが増えた。だから疲れがとれないんですよ！と小言を言われたのも記憶に新しい。

体の芯まで温まり、ほかほかでリビングに戻るといい匂いがリビングを制していた。急にお腹の音が鳴る。その音を聞いて、橘くんが小さく笑った。

「もうちょっとなんで、座って待っててください」

「……恥ずかしいから、笑わないで」

少し恥ずかしくなって、キッチンにいる橘くんを小突く。そのまま飲み物と箸を持って椅子に座った。

「おまたせしました～」

「ごめ……ありがとう」

手を合わせて、みそ汁を一口啜る。

「美味しい……」

「よかった」

ぽつり、ぽつりと仕事の進捗や最近の何気ない雑談を話す。向かいに座った橘くんはスマホも触らず、穏やかに話を繋げてくれた。

「ごちそうさまでした」

「柳川さん、肩こり大丈夫ですか？オフィスで結構肩揉んでたので気になって」

「もうガチガチ。運動しないとなあ」

「僕、マッサージめっちゃ得意ですよ」

失礼します、と両肩に手を置かれる。くすぐったさも感じないほど肩が凝っているらしい。ぐ、ぐ、と親指で肩を解されるのが気持ちよくて、思わず息を吐いた。

「は、あ……上手いね」

「気持ちいいですか？」

「う、ん。きもちい」

じんわり身体が温かくなって少し眠たくなってきた。もう歯を磨いて寝ようかな……と思っていたら、耳元で橘くんがささやきかけてくる。

「肩だけじゃなくて、他も解しましょうか？僕、上手いですよ」

「んー……お願い、しようかな」

「じゃあベッドに寝転んでください」

言われるがままベッドにうつ伏せで寝転んだ。リラックスさせるためか、照明も絞られて部屋は薄暗くなる。やばい、マジで寝そう。うとうとしていると、ベッドが軋んだ。

「橘くん？」

「腰とか脚やるんで」

私の上に乗り上げて、体重を掛けてマッサージが始まった。ちょうどいい指圧が気持ちいい。ストレスで固まっていた身体が緩んでいく感覚に、内側から空気が抜けていく。

「あー……そこ、もっと」

「ここ？」

「うん、そこ……寝ちゃいそう」

「寝ちゃってもいいですよ」

とろとろと意識を眠りへ向けていく。あと少しで寝る、というとき、じわっと刺激が背中を走った。意識が藻掻くように浮上する。なに、今の。起き上がろうにも、上に橘くんが乗っかっていて動けない。

びくっ！

まただ。温かくて大きい手の平が内ももを撫でていく。ゆったり撫でて、際どい内側をぐーっと押し込まれると甘い刺激が身体に回った。

「ちょ、橘くん」

「この辺、リンパが流れてるんですけどくすぐったいですか？」

「……」

「じゃあ流れが悪いんですね。ちょっと重点的にやりましょう」

「あ、ちょ、んんっ」

更に内へ内へと指が入り込んでいき、圧をかけて撫ぜられる。ただのマッサージなのに変な感じになるのは私が悪いのか。最近忙しくて碌に自分で触ってない。外からの刺激なんて久しぶりで敏感になってるの？

ぐるぐる考えているうちに手が離れてほっとする。今度は肩甲骨辺りに体重が掛けられた。気のせいかな、とまた瞼を閉じると今度は胸の方まで手が伸びてきた。リンパってそんなところまであるっけ？ぼんやり考えていると、指が胸へと伸びてきた。

あ、これって……。拒まなきゃ。でも、恋人だしいつかは……けど。

ぐるぐる考えている間にも、マッサージで火照った身体は微かな快感を拾ってしまう。考えるな、考えるなと思うほど、じわじわ意識していく。

わざとらしく脇の下から胸の外側を手が這って、声を出さないよう唇を噛みしめた。この手の意味はどっち？マッサージ？それとも……。

「ふ……っあ」

「上半身も結構凝ってるみたいですね……次は前からやりましょっか」

「あ、だめ今は……っ！」

ぐるん、と仰向けにされて咄嗟に顔を隠す。顔が熱い、今自分はどんな顔をしてるのか怖い。それよりもっと、橘くんがどう思っているのか怖くて見られない。こういうとき、なにか上手いこと言えたらいいのに、なんの逃げ道も思いつかなかった。

橘くんがゆっくり手を動かしてくる。恐る恐る目を開けると、そこには満足そうな顔をしていた。

「マッサージ、気持ちよくなっちゃった？かわいい」

「可愛いわけ、ないでしょ」

「どれが気持ちよかった？内もも？それともおっぱい？」

「ちが、きもちよくない、から！」

上半身を起き上がらせて肩を押す。けど、橘くんはびくともせず、そのまま私を抱き込んできた。

もしかして私、まずい？

「最近忙しかったもんね。頑張ってたね」

「あっ、耳元で……やだ」

「結構耳弱いよね、ふふ、俺の声すき？」

「んんっ、ひ、ああ……♡」